

## 第IV章 大分県の彩色系装飾古墳

大分県の装飾古墳は、壁画系と横穴系に分けられ、これまで両者で21基が確認されている。このうち壁画系古墳は、筑後川上流域にあたる日田市に4基、玖珠町に2基あり、あとは大分市、別府市、東国東郡国見町にそれぞれ1基ずつある。その中で、玖珠町鬼ヶ城古墳、大分市千代丸古墳、国見町鬼塚古墳は線刻を施した装飾古墳であり、彩色を施す装飾古墳は日田市に集中している。そしてこの古墳は、地理的な条件から筑後川流域の福岡県浮羽郡や朝倉郡周辺の装飾古墳の影響を強く受けたことが推察される。

ここでは先ずその古墳の概要を述べ、いくつかの問題点について触れてみたいが、これらの壁画は、現状では文様の判読がかなり困難な部分もあることを付記しておく。またガランドヤ古墳については前章に譲った。

### (穴観音古墳)

ガランドヤ古墳の南約700mの台地上に位置し、径10m、高さ2mの墳丘を残す円墳である。石室は全長約7mを測る複室石室で、前室奥行2.6m、幅2m、後室奥行3m、幅2.3mを測り羨道部の一部を失っている。また石室は大形の腰石を用い、持ち送りの少ない長方形プランをなす。

壁画は、赤・緑の二色で描かれ、奥壁に同心円文と三角文の幾何学的文様が、後室奥壁寄りの右壁に円文・鳥が描かれている。また前室の両腰石には同心円・舟・両手足を広げた人物が認められる。特に前室の同心円や舟は、輪郭線の内部をたたき窪めており筑後川流域では珍しい手法である。

### (法恩寺山<sup>註1</sup>3号墳)

日田盆地東南部の半ば独立した丘陵上にある。7基からなる古墳群のうちの1つで石室は全長8mを測り、後室奥行2.4m、幅2.3m、高さ2.3mである。前室は奥行1.9m、幅2.5m、高さ1.9mと横長に作られ、中央の通路を挟んだ左右は板石を立てて屍床とし、平面プランは三味線胴形をなす。また壁画は、奥壁に大石を立て、それ以外は最下段から扁平割石を平積みにし、天井部に向って次第に迫り出させてその空間をせばめている。

壁画は、赤色のみで描かれ、奥壁に円文1個、奥壁寄りの右壁に円文・同心円文が9個あり、後室は円文を主体とした構図で描かれている。前室は、後室に至る左右袖石とその上に架構した楣石に描かれ、袖石左側に馬と人物、右側に騎馬人物像らしきもの、楣石に同心円文・鳥が描かれている。また羨道より前室に通ずる袖石の左側内面には胴長の四足獣と円文が描かれている。

### (鬼塚古墳)

筑後川上流の玖珠川左岸にあり、万年山山麓から伸びるゆるい傾斜地に位置する円墳で、墳丘の原形をほとんど失っている。

石室は羨道部を失い、後室奥行約3m、幅2.2m、高さ3m、前室奥行1.8m、幅2.2m、高さ

2.1mを測る。また石室各壁の腰部は巨石を用い、その上方も大きめの石を横にしてわずかに迫り出しを認める。

壁画は、赤色による円文を中心にした構図で、後室奥壁と左右両壁、後室と前室の間にある右袖石の前室に面した位置に描かれる。特に奥壁は三重の大形円文を中心とした円文群で力強さを感じる。また袖石の同心円文は緑色の縁取りがあったと伝えられるが現状は明らかでない。なお鬼塚古墳と玖珠川をへだてた小岩扇山麓には線刻による鳥や木葉を描いた鬼ヶ城古墳がある。

#### (鬼の岩屋1号墳)

別府湾に面した緩い傾斜地に位置する古墳で、現状で径21m、高さ5.2mの封土を残す。石室は後室奥行2.3m、幅2.3m、高さ3.5mで、前室は奥行・幅共に1.3mの方形プランを呈し、腰石は巨大な石を並べその上方も比較的大形の自然石で築積している。また奥壁側には厨子形の組合せ石棺が存在し、前室左は板石を立てた小仕切が設けられている。

壁画は、前室の右壁に白色顔料で三角文が5つ並列して描かれているが、その他にも存在したと思われる。また壁面は全体を赤く塗り、重ね塗りの可能性がある。なおこの古墳の西側約50mには鬼の岩屋2号墳が所在し、ここでは最近、四神図及び日・月象の壁画復原が報告されている。<sup>註2</sup>しかしこれについては賛否両論があり本稿では除いた。

さて、ランドヤ古墳群をとりまく、県下の6基の装飾古墳の位置についてみると、先ず法恩寺山3号墳は、律令時代の日田郡家の推定地である鞍編郷に位置し、この一帯は5世紀以後に鞍負部を統率した日下部氏の本貫地といわれる。

穴観音古墳は三隅川左岸の台地上に位置し、ランドヤ古墳と共に古代石井駅の推定地である石井郷に属する。石井駅は、筑前朝倉郡把伎駅から豊後に入ってから最初の駅であり、石井郷一帯は弥生時代以来の東西交流の要地であった。

鬼塚古墳の所在する玖珠盆地は、鬼塚古墳の東側約1kmに唯一の前方後円墳で5世紀代の亀都起古墳が所在するが、以後は鬼塚古墳に近接する伐株山の中復から北西に伸びた丘陵上に石棺や横穴式石室を主体部とする円墳が連なり、一帯は和名抄にみられる小田郷の中心地となるようである。

鬼の岩屋1号墳は、江戸末期の碩学者帆足万里の「肄業余稿」に紹介され、早くから開口していたようである。古代においては、速見郡朝見郷に属し、郡家や駅の所在が推定されている。また鬼の岩屋古墳周辺には多くの古墳が分布していたと伝えるが今はほとんど姿を消している。このうちわずかに原形をとどめる太郎塚古墳では、金銅製唐草文透彫鏡板が出土しており、かつての古墳分布状況等からこの一帯が6世紀～7世紀にかけて中心的な位置を占めていたと思われる。

以上のようにこれらの装飾古墳は、その地域においては中心的な位置に所在し、政治的にも大きな権力を握った有力層の墳墓とみることができる。しかし墳丘は10～20m程度の円墳であり、必ずしも突出した規模を誇るものではない。

次に石室の構造は、全ては前・後室からなる複室石室で、平面プランは方形、断面は持ち送りの少ない箱形を呈して腰石に大形の石を用いるのが一般的である。

このうち法恩寺山3号墳は、前室の横幅を広くとり持ち送りの強い典型的な三味線胴張りを呈しており、県内では類のない石室構造である。

しかも壁面は腰石を用いず、最下段より石材を平積みになっている。このような石室構造は、福岡県甘木市や朝倉郡を中心に広く分布しており、装飾古墳としては線刻のある朝倉町狐塚古墳の類例を指摘することができる。またガランドヤ2号墳も前述のように今回の調査によって胴張りが確認されたが羨道部等の状況は不明である。しかし露出した東側の状況からみると、全長約7.6mを測り、これから玄室内を差引くと残りが4.3mとなり、この全てを羨道とすると、この地方では他に例をみない長い羨道ということになり、おそらく小規模な前室を伴う複室石室<sup>註4</sup>と思われる。この様なタイプの石室プランは、福岡県浮羽郡吉井町古畑古墳などに求められ、法恩寺山3号古墳とは系譜を異にすることが指摘される。

また壁画の面から検討すると、先ず図柄の顔料は赤・緑・白の3色が用いられている。このうち穴観音古墳は赤・緑を用いており、ガランドヤ古墳と共通した特色をもつ。また、鬼の岩屋1号墳は白色顔料で文様が描かれているが、石室全面を赤色で塗った後に重ね塗りしており、赤色の地塗りに緑色を配したガランドヤ2号墳と相似た手法をもっている。さらに鬼塚古墳は、基本的には赤色で描かれているが、袖石の同心円文には緑色の縁取りが伝えられている。こうしてみると赤色顔料1色による壁画は法恩寺山3号墳だけとなり、石室構造だけでなく配色の面でも他の古墳とは異なる。

次に図柄とその描かれた位置についてみると、穴観音古墳は奥壁に同心円と三角文の幾何学的文様を中心にし、後室右壁と前室左右壁の腰石に人物・舟・鳥・同心円文等が描かれている。また法恩寺山3号墳は、奥壁と後室右壁は円文だけが描かれ、人物・鳥等の具象図は前室に面した袖石に描かれる。さらに鬼塚古墳においては、福岡県吉井町日ノ岡古墳の奥壁を思わせるような全体に同心円文が描かれている。つまりこれらの古墳では後室の構図は、幾何学的文様が中心となっており、人物や舟などの具象図は前室に描かれている。この点からみるとガランドヤ1号墳のように奥壁に多彩な図柄を配置した構図はこの地域では特異な存在と言えよう。

以上、県内に分布する彩画を施す装飾古墳についてガランドヤ古墳と対比しつつ述べたが、これらから法恩寺山3号墳は、他の装飾古墳とは石室構造、色の配色等にちがいをみせ、筑後川南岸沿いに伝播する古墳文化とは別に、甘木・朝倉周辺の影響が強く伺える。しかしその影響は、法恩寺山3号墳にとどまり、豊後に広く伝播することはなかったようである。

最後にこれらの装飾古墳の年代についてみると、九州に存在する装飾古墳の色の組み合わせから、全体としては終末期に近い年代が与えられる。また図柄においても器物の図形は少なく、人物・鳥獣像が主であり同様な年代が指摘される。

このうちガランドヤ2号墳は緑色1色で描かれ、また石室の構造から吉井町古畑古墳に近いことが推定され、複室構造が定型化する以前のものとして6世紀中頃までに遡ることが可能で

あり、出土した須恵器からもその傾向が指摘できる。一方、同じ胴張りをなす複室構造の法恩寺山3号墳は、奥壁以外の壁面に腰石を用いず最下段より石材を横積みにしており、やや古式の観をもたせるが、このような構造は甘木市柿原古墳群<sup>註5</sup>など甘木市、朝倉郡周辺では顕著である。またガランドヤ1号墳や鬼塚古墳は胴張りを有しないものの腰石に大形の石材を用いず、石材の構築の面では1号墳に類似することが指摘され、穴観音古墳よりは古い年代が考えられる。このうち鬼塚古墳は、後室が前室の2.5倍の奥行を有する長方形プランを呈し、壁画も同心円・円文のみで構成されており、ガランドヤ1号墳と同時期ないしはそれを遡る年代も考えられる。

以上から県内に分布する彩色を施す装飾古墳は、ガランドヤ2号墳を6世紀中頃、1号墳と鬼塚古墳を6世紀後半、法恩寺山3号墳を6世紀末～7世紀初頭に位置づけられ、穴観音古墳と鬼の岩屋古墳も法恩寺山3号墳とほぼ同じ年代が考えられる。(渋谷)

註1 賀川光夫・小田富士雄他『法恩寺山古墳』日田市教育委員会 1959年

2 坂田邦洋・副枝幸治「鬼の岩屋第2号墳の壁画について」『別府大学紀要』第26号別府大学 1984年

3 古賀精里・渡辺正気「筑前国朝倉郡狐塚古墳」『福岡県文化財調査報告書』第17輯 1954年

4 小林行雄『装飾古墳』1964年

5 福岡県教育委員会「甘木市所在柿原古墳群の調査Ⅰ」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』4 1983年